



勘違いの
工房主
アトリエマイスター

Kanchigai no
ATELIER MEISTER

英雄パーティの元雑用係が、
実は戦闘以外がSSSランクだった
というよくある話

5

時野洋輔

Tokino Yousuke

ILLUSTRATION

ゾウノセ

登場人物紹介

エレナ

メイド仮面の名で
武道大会に参加する、
謎の女性。

ローレッタ・エレメンツ

ユーリシアの従姉で、
インセマ島の島主。
一族のため、ユーリシア
を呼び寄せた張本人。

チツチ

諸島都市連盟コスキート
で、クルト達の案内を買っ
て出た怪しげな冒険者。

クルト・ロックハンス

本人は無自覚だが、戦闘以外の適性ランク
が全てSSSという超天才。
失踪したユーリシアを探しに向かった諸島
都市連盟コスキートで、武道大会に参加する。

ユーリシア

クルトの工房に所属する
元王家直属冒険者。
正体を隠し武道大会に
参加している。



リーゼロッテ・ホームロス

ホームロス王国の第三王女。死に
至る呪いを治してくれたクルトを
慕い、行動を共にするようになる。

プロローグ

僕、クルト・ロックハンスは、子供の頃から戦うことが苦手だった。僕だけじゃない。

僕が住んでいたハスト村の村民は、誰もが戦闘が苦手だった。

「魔物が出たぞ！」

僕が六歳になってしばらくしたある日、村人が拡声の魔道具を使ってそう叫び、見張り台の上で警告の鐘かねを激しく鳴らした。

こういう時は、女性や子供は村で一番頑丈がしやなオリハルコンとアダマントイトの合金でできている避難所に逃げる。ただ、僕はその日、村から少し離れた場所にいたため逃げ遅れた。

村の入り口の近くの茂みに隠れた僕は見てしまった。

村を襲う災厄——十匹のゴブリンの姿を。

恐怖で身が竦すくむ。

二桁以上のゴブリンが村を襲うのは七年ぶり。今回は村が引越しをする前で、僕がまだ母の胎内にいた時の出来事だったらしい。

その時は運よく他の町の冒険者がいてくれて事なきを得たが、しかし今日は村への来訪者はいない。

僕は思わず、葉草採取のために手作りしたミスリルの鎌かまの刃の部分を握ってしまっていたようで、手はいつの間にか血まみれになっていた。アドレナリンのせいで痛みをほとんど感じていないが、このままでは血の匂いで気付かれる危険があるので、無事な方の手でパッと薬を調合して傷口に塗り込む。

傷口のばい菌が駆除され、出血が止まり、皮膚が再生された。

幸い、ゴブリンは隠れている僕には気付かず、村の入り口へとまっすぐ向かった。

村の入り口の前には、ミスリルゴーレムを使ったバリケードが敷かれている。

僕達の村にいるゴーレムは、百トンの岩を運び、針に糸を簡単に通せるくらい細かい作業も得意なんだけど、土木作業用に作られたものだから戦いには向かない。

一応、ゴーレムの周りには武器を構えた人もいる。彼らが持っているのは一振り直径十メートルの木を伐採するオリハルコンの斧おのや、白金鉱石はくごんこうせきをも軽々砕くアダマントタイトのピッケル、永久凍土えいきどにある冰山こぶさえ、一瞬で沸騰ちゅうとうさせる火炎放射器かえんぱしあだけど、どれも伐採用、採掘用、除草用の道具なので、ゴブリンとの戦いに役に立つとは思えない。

僕が持っているミスリルの鎌かまだつて同じだ。一振りすればかまいたちを生み出し、十メートル離れた木に生えている木の実を落とすこともできるが、魔物相手に使ったら、緊張して変な方向に飛

んでいってしまう。所詮しょせんはこれも戦いの道具なんかじゃない。

雑貨屋に行けば、エクスカリバーという鎧よろいの剣が一本だけある。でも、素人しろうとが戦いの道具なんて使おうものなら、緊張のあまり自分を刺してしまう恐れがあるので誰も使おうとはしない。

どうしたらいいんだろうと見守っていたんだけど、ゴブリン達はなぜかゴーレムのバリケードを見て対処に困っていた。

ゴーレムのバリケードなんて、僕のような子供でも数秒で突破できるはずなのに、なぜだろう？ 膠着状態じょうちくが続く中、先に動いたのはハスト村の住民の方だった。

木こりのアルプルさんが、オリハルコンの斧を持って単身飛び出していく。

無茶だ！

トレント相手なら一人で百本相手にしてもかすり傷を負わないアルプルさんとはいえ、一人でゴブリン十匹を相手にするなんて！?

アルプルさんは斧を振り下ろしたが、ゴブリンの手前五センチのところの地面に斧が命中し、地面を大きく陥没かんぼつさせてひっくり返ってしまった。

「アルプルがやられた！」

「ゴーレム、アルプルを助けるんだ！」

倒れているところを木の棒でた殴りにされているアルプルさんを、ゴーレムが助け出した。

そして、村人達はゴーレムにゴブリンと戦うように命令するが、やはりゴーレムの攻撃はゴブリ

ンには届かない。動く相手を攻撃するというのは、これほどまでに難しいのだろうか？と、その時だった。

「なにをしている？ ゴ布林相手にお遊戯か？」

そうやって現れたのは、旅の剣士風の男だった。

うちの村にたまに遊びにくる、冒険者のアーサーさんだ。

「アーサーさん、逃げろ！ 危険だぞ」

「……まさか、本気で言ってるのか？ ゴ布林十匹相手に？ このバカみたいな力を持つ村が苦戦しているのか？」

アーサーさんはなぜか呆れた感じでそう言うと、鉄の剣を抜いた。

そう思った次の瞬間、ゴ布林達十匹は切り伏せられていた。

「肩慣らしにもなりやしねえ」

そう言っって血をふき取り、剣を収めるアーサーさんの姿に、僕も村人も全員驚きを隠せない。

冒険者は強いと聞いたことがあるけれど、まさかここまでだなんて思いもしなかった。

思わずその場で立ち上がって、言葉を漏らす。

「……凄い」

恐怖はなくなつたが、今度は感動で体が動かない。

そんな僕に、アーサーさんは気付いた。

「大丈夫か、坊主」

アーサーさんは僕にそう言っって手を伸ばす。

僕はその手を取り、立ち上がってお礼を言っった。

「あ、ありがとうございます。アーサーさん」

「なに、武道大会の肩慣らし……にはならなかつたが、準備運動の手前みたいなもんだ。気にするな」

「武道大会……ですか？」

「ああ。俺みたいな戦いに命を懸ける猛者が世界中から集まって武を競う大会だ」

そんな大会があるんだ。

しかも、そこにいるのはアーサーさんみたいな、それこそ十匹のゴ布林を一瞬で倒す猛者だなんて。

僕が武道大会に参加することは一生ないだろう。

でも、僕はその時、夢を見た。

いつか、一人の男として武道大会に参加してみたい、って。

その後、村の人はアーサーさんを酒宴に誘い、さらに礼として在庫のエクスカリバーを渡した。

「本当にいいのか？ ゴ布林を倒しただけで？ これ、ものすごい剣だぞ？ 本当にいいのか？」

村の誰かが見様見真似で作った剣で、商人さんに売れなかつたあまり物なのに、アーサーさんは

第1話 武道大会決勝トーナメント

決勝トーナメントの抽選会が始まった。

先日の予選会と違い、選手の数は多くない。

あつさりと決定したトーナメント表が発表されたが、僕はペアを組んでいるユーラさんとは別行動を取って、人を捜していた。

僕が捜しているのは二人。

一人は、僕が以前所属していた冒険者パーティ「炎の竜牙」のリーダー、ゴルノヴァさん……にそっくりな、決勝トーナメント参加者。髪の色は違うんだけど、彼がゴルノヴァさんなんじゃないかって疑っている。

もう一人は、同じ工房で冒険者筆頭として働くユーリシアさんだ。彼女は突然姿を消してしまっただけで、どうやらこの武道大会に出ていて、決勝トーナメントに残っているらしい。

一緒に探しにきた、同じ工房で働くリーゼさんから、そんな情報を手に入れたので会場で探していたけれど、やっぱり見つからなかった。

リーゼさんの言う通り、変装しているのだろうか？

そう思っただけを見回していた僕の目に、ある人の姿が目に入った。

「……っ！」

あの人は。

赤かった髪が紫色になっているけれど、間違いない。

僕は急いで追いかけた。

途中、僕のファンだという人に声をかけられたり、いまだに慣れないスカートのせいで転びそうになったりしたけれど、僕は彼に追いつく。

「あの、すみません！」

声をかけると、その男の人は振り向いた。

やっぱりそうだ。

間違いない——この人は——

「誰だ？ お前は？」

「ゴルノヴァさんですよっ！」

「——っ!？」

紫色の髪の人物——ゴルノヴァさんは、僕の言葉に驚き、目を見開いた。

僕が以前所属していた冒険者パーティ、「炎の竜牙」のリーダーであるゴルノヴァさん。彼の姿を選手控室で見かけた気がしたから武道大会に参加したんだけど、やっぱり見間違いないじゃなかった

んだ。

あ、そうだ。この姿じゃ、僕だつてわからないよね。

「ゴルノヴァさん、この姿じゃわからないかもしれないけど、僕は——」

「人違いだ」

「……え？」

僕が説明しようとしたところで、冷たくそう言い捨てられてしまった。

「ゴルノヴァ？　それが誰かはわからないが、俺様はそんな名前じゃない」

「で、でも……」

人違い？

本当に？

髪の色は違うけれど、でも、その顔は。

「俺様の名前はパープルだ。ゴルノヴァなんて男は知らん。悪いが、俺は人を捜してるからもう行くぞ」

「ゴルノヴァさんによく似た、パープルという男の人はそう言うと、顔をお面で隠したメイド服の女性と一緒に去っていった。

……人違いだったのか。

確かに、髪の色はゴルノヴァさんとは全然違うし、他人の空似……なのかな？

ユーラさんに迷惑をかけて、結局人違いだった。
僕はなんて人騒がせなんだ。



まったく、焦らせやがって。なんなんだあの女は。

俺様がゴルノヴァだということがバレたら大変なことになる。

なぜなら、俺様は現在、ホームロス王国から指名手配をされているからだ。

ホームロスの王都で、糞マズイ飯を提供してきたレストランに説教をしたら、衛兵が俺様を拘束しようとしてきた。それに反撃をした——ただそれだけなのに。

しかし、俺様の完全なる変装を見破るやつが現れるとは思わなかった。

賞金稼ぎという感じではなかったから、きつと俺様の熱狂的なファンかなにかだろう。

まあ、きつちり否定しておいたし、問題ないだろうな。

「それで、メイド仮面。クルは客席にいるか？」

俺様は横にいるメイド仮面——ポンコツメイドゴーレムのエレナに、クルトがいるか確認する。

こいつはメイドとして貴賓室きひんしつで働いていたから、偽名で勝手に登録させているのだ。



「いいえ、パープル。見つかりません」

「だよな。あいつのことだ、俺様を見つけたら絶対に声をかけてくるはずなのに、今のところ声をかけてきたのはメイド一人だけだ。なんだ、俺様はメイドに縁があるのか？」

「あれはメイドではなく給仕です」

「似たようなもんだろ？」
「違います」

その違いはわからないが、エレナを怒らせるのは怖いので、俺様はそれ以上追及しない。

このエレナは、ハスト村があったと言われるシーン山脈の謎の遺跡で見つかった人形——ゴーレムだ。

バカ強く、どうもクルの野郎と関係があるらしい。

なぜか俺様とクルが恋人同士であると勘違いしているため、クルを捜すのに利用させてもらっている。

「でも、少し意外ですね。パープルはクルトのような可愛らしい子が好きなのだと思っていましたが……」

「ああ？ 何言ってるんだ？ 可愛い女、旨い飯、強い武器、民衆の喝采^{かっさい}、全ては俺様のためにあるに決まってるだろ」

ただしこいつは例外だ。こいつは見た目は可愛い女だが、化け物だからな。

「ですが、あの給仕、かなり可愛いように見えましたか」
「ん？」

振り返ると、さつき俺に声をかけてきた女が残念そうに俯うつむいている。

確かに、言われてみれば可愛い顔をしている。

しかし、なぜだろう。

「あいつの顔を見ているとイライラしてくるんだよね」

まるでクルを見ているみたいにな——と、エレナに聞こえないよう内心で呟つぶやいた。

このメイドゴーレムは、俺様とクルを結婚させようなんていう意味不明な勘違いをしているから、ボ口を出すわけにはいかない。

とにかく、まずはこの大会で優勝し、俺の指名手配を撤回させ、権力を手にする。

次にクルを手中に収め、あいつと一緒にいるというホームロス王国の第三王女とやらを言いなりにする。

それが俺の計画だ。

「それはよかったです。ならば、彼女と戦うことになっても全力で戦えますね」

「あん？ それはどういう意味だ？」

「先ほど発表されたトーナメントによると、彼女とユーラのペアと二回戦で戦うことになるかもしれませんが。予選を一位で通過しているペアですからね」

俺もトーナメント表は見たが、詳しくは覚えていない。

それより、あの給仕が予選一位だって？

嘘うそだろ？ どこからどう見てもクルと同じような雑魚ざぎょじゃないか。

ユーラっていう相方の男が強いのか？

というか……

「思い出した。冗談はよせ、俺達の二回戦の相手はあんな雑魚じゃなく、チャンプとイオンだろうが」

チャンプとイオンは前回の優勝コンビだ。必ず勝ち上がってくるに決まっている。

「ええ。ですがクルミとユーラのペアと戦うことになると思います」

「お前は、あのメイ……給仕が前回の優勝者を倒して二回戦に上がっていると読んでいるのか？」

「はい。そういう雰囲気があります」

エレナが頷うなづいた。

……本気で言ってるのか？

肩を落として去っていくクルミという女を見たが、やはりエレナの言葉を信じることはできなかった。



武道大会の決勝トーナメントが始まった。

私はこの大会に、ユーラと名乗って参加している。

隣では、ペアであるクルミが、出場選手用の席から試合の様子を観戦していた。

クルミの奴、さつきはかなり落ち込んでいたように見えたが、今は純粋な子供みtainな目で試合を見ている。

「……………」

私は貴賓席を見た。

あそこにおそらく、リーゼが……そして、クルトがいるのだろう。

冒険者に強い憧れを持つクルトも、このクルミのように輝いた目で試合を見ているのだろうか？

それとも、私のことを捜そうとして、それどころではないのだろうか？

後者だとしたら、申し訳ないな。

「どうしたんですか、ユーラさん」

ユーラ……その名前を聞くたびに、罪悪感がこみ上げてくる。

私は本当はユーリシアという女冒険者だ。

にもかかわらず、こうして男装をし、一人の男として武道大会に参加している。

私とこの大会の優勝者を結婚させるといふ、イシセマ島主である従姉いとこのローレッタ姉さんの目論もくろみ見を潰すために。

しかし、そんな目的のために、クルミという無垢むくな少女を利用してしまっていた。

彼女は元々、一人の男に会いたがためにこの大会に参加した。

そして、それは先ほど叶かなったそうだ。

ただ、その人物は思っていた人物ではなく、人違いという結末だった。

そのため、本当はクルミにはもう戦う理由がない。

だというのに、私の都合で利用してしまっている。

「…………ごめんね」

「…………え？ なにか言いましたか？」

「いや…………次は私達の試合だな」

「あ…………そうでしたっ！」

そう言ったクルミの手が震えていた。

武者震いか？

いや、普通に緊張しているのだろう。

仕方がない——私達の一回戦の相手は前回大会優勝者のチャンプとイオン。優勝候補筆頭のコン

じだからな。

「私一人で戦うから大丈夫だ。クルミは離れた場所において、私が負けたら自分で舞台から降りるなり、降参するなりしてくれて構わない」

「わ、わかっています。でも、援護はさせてください」

「ああ、頼りにしてるよ」

私はそう言ってクルミに微笑みかけた。

すると、クルミの顔が赤くなる。

「……戦いで頼りにされたの……生まれて初めてかもしれません。嬉しいです」

「あ……ああ、そんなに気負わずにな」

優勝候補筆頭のコンビ相手に、実質一人での戦い。

いきなりクライマックスという感じだね。

私とクルミは闘技場の舞台に向かった。

クルミは緊張のあまり、右手と右足が同時に出ている。とつてもベタな緊張の仕方だ。

「[[L・O・V・E・クルミちゃーんっ！]]」

客席では、クルミのファンらしい男達が、桃色の服を着てクルミの応援をしていた。

「クルミちゃああん、頑張つてええっ！」

「チャンプとイオンに負けるなあっっ！」

「でも怪我だけはしないでねえええっ！」

クルミの気が凄い。

「キヤアアア、ユーラさまあああっっ！」

「ユーラ様、こっち向いてえええっ！」

……私の人気も凄い。

普通、優勝候補のコンビが出てきたら、そっちへの声援の方が大きくなりそうなのに、応援の大半は私達に向いている。

さて、改めてこの武道会のルールを確認しよう。

勝負の内容は簡単だ。

男女ペアで戦う。

気絶、舞台からの転落、もしくは10カウントダウンすれば戦闘不能とみなされ、以後戦いに参加できなくなる。

先にペア二人ともが戦闘不能になれば負け。

つまり、仮にクルミが試合早々舞台の外に出たとしても、私一人で勝ち残ればいい。

なお、魔法の使用は自由。

武器、道具の使用も基本自由であるが、事前に申請する必要がある。さすがに攻城兵器のような

武器の持ち込みは規制されるらしい。
最後に、相手を殺してはいけない。

まあこんなところだろう。

「――相手はえらい人気だな、イオン」

「ええ、少し嫉妬しちゃうわね、チャンプ」

出てきた。

チャンプとイオンのコンビだ。

チャンプは完全に前衛タイプ。彼の拳の届く範囲にまで近付き、無事だった人間はいないという。そして鞭を持つイオン。彼女の鞭は長く、その扱いは正確無比で、小さな魔物の筆頭であるベビースライムの核のみを、正確に潰すことができる。

「さて、どう戦ったものか――正面から戦うのは不利だね」

「あの……ユーラさん――」

私が呟いていると、クルミがある提案を囁いてきた。

……本当にそんなことができるのかい？

私はそう尋ねようと思ったが、クルミができると言ったのだからできるだろう。なにせこの子は、クルトと同じハスト村の出身みただからね。

「よし、任せた」

私が頷くと、クルミも笑顔で頷く。

そして、クルミは試合開始の宣言をしようとする審判の女性に近付いていき、耳元で囁いた。

審判が怪訝な表情を浮かべつつ黙って頷くを見て、チャンプとイオンが警戒するように身構える。

まあ、こつちに作戦があると言っているみたいなものだから仕方ないね。

審判が手を上げる。

『それでは、これよりCブロック第一試合――ユーラ・クルミペアVSチャンプ・イオンペアの試合を始めます――試合……はじめっ！』

審判はそう宣言した直後、走って舞台の上から飛び降りた。

と同時に、クルミも私と一緒に後ろに大きく跳躍し、背負っていた巨大な斧を振り下ろす。当然、その斧はチャンプ、イオンには全然届かない。

しかし、彼女の振り下ろした斧は狙い通りに命中した。

――石でできた闘技場の舞台に。

クルミが振り下ろした場所から罅が一気に広がり、チャンプとイオン、二人の足下が一瞬にして瓦解する。

この武道大会において、石舞台が破壊されたことは何度もあった。丈夫な石ではないから、斧やハンマーで叩けば砕けるし、凄腕の拳闘士ならば素手でも穿つことはできる。

しかし、一撃で舞台を半壊させるなど前代未聞だろう。ルール上、体の一部が地面にいたら場外負けとなる。たとえ、舞台上に現れた穴に落ちたとしても、それは場外負けだ。完全な不意打ち。

足下に現れた落とし穴を避けられる人間などいるわけがない。私がチャンプとイオンの立場だったら、まずそのまま場外負けになっていただろう。

しかし、二人は違った。

イオンは突如現れた穴に戸惑い落下しながらも、武器の鞭を振るう。

その鞭はチャンプに絡みつき、そのまま彼を残った舞台上に放り投げ、落下から救い出した。その直後、イオンは地面に着地する。

一瞬で自分を犠牲にして、チャンプを救う選択をしたのだ。

さすがは前回チャンピオンのコンビだと私は感心した。

イオンによって辛うじて場外から免れたチャンプは、仁王立ちで私達を見る。

「やってくれたな、完全に油断していた。イオンの仇、取らせてもらうぞ」

チャンプがそう言って殺気を放つ。

凄まじい威圧だ。

全身の毛穴が開くんじやないかってくらいに恐ろしい。

思わず身構えた時、突如殺気と威圧が消えた。

なんで殺気を止めたんだ？ 無我の境地？

そう思ったが、なぜかチャンプは、対応に困ったように頭をポリポリと掻いて、私に尋ねてきた。

「なあ、兄ちゃん。そっちの嬢ちゃん、大丈夫か？」

「え？」

私が振り返ると、そこではクルミが泡を吹いて気絶していた。

「……あんたの威圧が怖くて気絶したみたいだ」

私はそう言って苦笑した。

まったく、いきなり舞台を壊す荒業を見せたとしたら、ただの威圧で気絶するとか、どんだけ繊細なんだよ。

「悪い。この子を場外に下ろしてもいいかな？」

「ああ……イオンに手当てをさせようか？」

「大丈夫、外傷もないし、寝かしておいたら大丈夫だろ」

私はそう言って、チャンプと審判に許可を貰ってから、クルミを抱き上げて一度舞台から降り、場外の壁際に寝かせた。

本当にこの子は、凄いんだかダメダメなんだか。

それから舞台に戻って仕切り直しといききたかったのだが……さっきまでの殺伐とした空気はなく

なっていた。

チャンプもすっかり毒気が抜かれたような表情だ。

ただ、かといって戦わないわけにはいかない。

「せつかくクルミが頑張ってくれたんだ。私も負けられない」

「俺も、イオンが見ているからな。それに、男同士の勝負の方が俺は好きだ」

そう言って嬉しそうに笑うチャンプ。

私は女なんだけどね、とは言えない。

私はクルトに作ってもらった愛剣『雪華』を抜いて構える。

そして、私達の戦いが始まった。

「あれ？　ここは？」

クルミが目を覚ましたのは、チャンプ達との試合が終わってから一時間後だった。

「大会本部の医務室だよ」

「医務室ですか？」

ふらふらとした目で周囲を見渡すクルミは、どうやらまだ現状を把握できていないようだった。

だけど徐々に視線がはつきりとしてきて、思い出したように口を開く。

「……………あつ！　試合はっ！　試合はどうなったんですか？」

「大丈夫だ。なんとか勝ったよ」

私がそう言うと、クルミは笑みを浮かべた。

でもそれは、想像していたのと違ってどこか悲しそうな笑みだった。

もっと大喜びしてもらえろと思っただけだな。

それにしても、厳しい戦いだった。

肉を切らせて骨を断つどころか、骨を切らせて肉を断つと呼べる手段でなんとか勝利できた。

剣士として致命傷ともいえる傷を負ったが、そこは、以前、クルトから貰った傷薬のお陰ですっ

かり完治している。

「強いですね、ユーラさんは。僕なんて本当になんの役にも立たなくて」

「どうやらクルミは、自分がなんの役にも立てなかったと思っただけな表情を浮かべていたみたいだ。」

「なに言ってるんだ。イオンを倒したのはクルミの手柄だろ」

私はそう言ってクルミに軽くデコピンをした。

クルミは少し涙目で額を押さえる。

あれ？　強かったかな……………かなり手加減したつもりだったんだけど。

「大丈夫か？」

「大丈夫です……………その、ユーラさんの気遣いが嬉しくて……………それに、僕が戦いに役に立ったって

言ってもらって……あつ！ 舞台！ 急いで直さないと！」

「直すって、クルミ、あの壊した舞台、修理するつもりだったのかい？」

いくらなんでもあの舞台を元通りに戻すのは……いや、クルミならやりかねない。

だって、クルトなら絶対にできるから。

「はい！ だって、あんな状態じゃ、次の試合ができないじゃないですか」

「大丈夫だよ。試合は別の会場に移って今も続いている。準決勝からは別の会場で行われる予定だったから、そこを使ってるんだ。ただ、今度から会場を壊すのはやめてくれて運営委員に言われたよ」

「そうですか……じゃあ、別の方法を考えないといけませんね」

今回みたいな奇想天外な方法を他にも考えられるのだろうか？

事前に話を聞いておかないと、こっちの心もたないね。

そうだ、もう一つ伝えておかないと。

「ああ、それと、第二試合の相手が決まったよ。パールとメイド仮面のコンビだ。試合内容は見てないけれど、パールは戦いに参加せず、メイド仮面が全ての攻撃を素手で受け止め、反撃して倒していたそうだ。実力は未知数。今大会のダークホースと言われているよ」

まあ、ダークホースと言われているのは私達も同じだろうけれど。

既に私達とパール達の戦いのチケットは完売していて、ダフ屋による転売の値段は通常価格の

十倍以上になっているらしい。

「第二試合はこの後始まるけれど、クルミは行けそうかい？ 無理なら棄権さげんするけど」

「大丈夫です。ちょっと休憩したら——あの、僕の荷物はどこですか？」

「荷物ならそこにあるよ」

クルミの荷物は運んでおいた。

結構な量と重さだったので、クルミ自身よりもこっちを運ぶ方が一苦労だった。

クルミはそんな荷物をちらりと見る。

「……あの、やっぱりこの服装だと戦いにくいみたいなので、着替えようと思うのですが」

「ああ、その方がいいね。私が手伝おうか？」

「いえ、その……」

クルミは俯いてなにか言いにくそうにしている。

ん？ どうしたんだ？

「……部屋から出ていってもらえると助かります」

「あつ！ 悪い悪い」

なにか『手伝おうか』……だ。今の私は男装しているんだった。

私はクルミに謝罪し、医務室を出た。

失敗したなあと思っていると、部屋の外に人がいることに気付いた。

その姿を見るまで全然気配がなかったことに驚愕したが、それも仕方がないだろう。というのも、そこにいたのはローレッタ姉さんだったから。

この状況を作った元凶である彼女を前にして、背に汗が滲み出る。

「クルミ選手の容態は大丈夫でありますか？ ユーラ選手」

ローレッタ姉さんが尋ねてきた。

「ええ、大丈夫です」

声が震えないように注意しながら、私はそう言って顔をそむける。

「彼女は怪我はしていません、ただ気に当てられただけですから」

「そうでありますか。あなたは優勝候補でありますからね、パートナーが不在のせいで不戦勝になる、なんて事態にならなくてよかったですよ」

ローレッタ姉さんはそう言い残すと、あっさりと去っていった。

彼女の背を見ながら、私は生唾を呑み込む。

本当にクルミのことが心配でわざわざここまで来たのだろうか？

もしかして、私の正体に気付いているんじゃないだろうか？

私が悩んでいると、背後で医務室の扉が開く。

「ユーラさん、着替え終わりました……あの、どうしたんですか？」

「い、いや、なんでもないよ。それより、クルミ。本当に着替えたのか？」

さつきと見た目は変わってないみたいだけど。

「はい、スカートの下にズボンを穿きました」

クルミはそう言ってスカートの裾を掴んで捲りあげ、私に半ズボンを見せてきた。

その恥ずかしいポーズに「さつきの羞恥心はどこにいったんだ」と私はため息をついた。



第一試合で、僕、クルトは闘技場の舞台を叩き割るといって誰にでもできる不意打ちでイオンさんを場外に落とし、なんとかユーラさんの役に立った。

でも、それだけじゃダメだ。

僕が闘技場を叩き割るところは見られてしまった。

次の相手に同じ不意打ちは通用しないだろう。

たとえ、僕が第一試合のように舞台を叩き割ったとしても、ある程度器用な人なら、場外に落ちる前に舞台の修復を済ませてしまう。いや、武道大会の決勝トーナメントまで残っている人達だ。

舞台が壊れる前に、逆位相の攻撃をぶつけて衝撃を完全に緩和させることくらいしてくるはずだ。

少なくとも、僕ならばそうするから。

こうなってしまうは、斧を振り回すことしかできない僕じゃ、試合中に出番はない。

ユーラさんの言う通り、邪魔にならないように舞台の端で待っているか、自分から場外に落ちるしかないだろう。

でも、それだけじゃダメだと思う。

僕にできることはなにか？

ルールを再度確認する。

勝負は男女二対二の戦いで、得物は自由。ただし、手に持てない道具——攻城用のバチスタなどの使用は禁止。

……手に持てるものは自由？

それならば、あれが使えるんじゃないかな。

僕は予備の闘技場に向かうため、一緒に街を歩くユーラさんに尋ねた。

「ユーラさん、まだ時間がありますか？」

「ん？ 試合開始までは少し猶予があるけど、どうした？」

「道具を作ろうと思います。僕、攻撃用の道具とか作るのはあまり得意じゃないけど、それでも、できることはしておきたいんです」

「……時間は二十分もないぞ？ 作れるのか……は聞くまでもないか」

ユーラさんは苦笑し、「やれるだけやってみたらいい」と言ってくれた。

「道具は持っていますから、五分で終わらせませす！」

僕はそう言って、スカートの中に隠していた、使い慣れた靴かほんを取り出す。

「……どこに隠しているんだ、どこに」

呆れたようにユーラさんが言うけれど、でも、この靴かほんってこの服に合わないからね。

「ん？ クルミ、その靴……いや、同じ村の出身だから、同じ物があっても不思議じゃないか」

「え？」

これ、どこにでもあるような靴だけど、気になったのかな？

「いや、なんでもない。それで、なにを作るんだ？」

「ちよつとした装飾品です……」

でも、これだけじゃ道具も素材も足りない。

……あ、あのお店は。

「ユーラさん！ あそこです！」

「あそこって……硝子細工かすの店？」

「はい、あそこなら、僕が欲しいと思っっている物を作れます！」

僕は店に入ると、硝子細工の店の店長さんに事情を説明して、作業場を少し借りられないか尋ねた。

店長さんは最初、少し渋った顔をしていたが、ユーラさんがなにかを握らせたところ納得してくれた。

たぶん、お金だろう。

あとでユーラさんに返さないといけないな。

僕は作業小屋を借りて、それを作り始めた。

素材と道具を準備する僕を見て、ユーラさんが尋ねてくる。

「クルミ、なにを作るんだ？ いい加減に教えてくれないか？」

「眼鏡です」

「眼鏡か。で、どんな凄い眼鏡なんだ？ 眼鏡から火炎光線が出る魔道具とかか？」

「目から火炎光線って、ゴーレムじゃないんだから、そんなの出しませんよ」

「いや、目から火炎光線が出るゴーレムって私は知らないんだけど、そんなのあるのか？」

「え？ ないんですか？」

「どうやら、ユーラさんは知らないらしい。」

道を塞ぐ岩を破壊するのに便利なんだけど。

ああ、都会じゃ岩が道を塞ぐことなんてないから、目からレーザーが出るゴーレムは必要ないのかな？

「でも、これは目からレーザーは出ませんよ。レーザーを防ぐことくらいならできますけど」

僕はそう言って、チャチャッと完成させた眼鏡をユーラさんに見せた。

怪訝な表情を浮かべるユーラさん。

まあ、見た目からして普通の眼鏡じゃないからその反応も当然か。

なんといったって、これは眼鏡は眼鏡でも、夕日が眩しいと思った時にかけるサングラスだから。

「……ちよっと目を離れたうちに完成している。いったい、いつの間にか作ったんだ？」

「え？ だって、サングラスを作るのってスピードが大事なんですよ？ 太陽が眩しいと思った時に、近くで竈を作って、珪砂とか使ってささっと作るものですよ。作るのが遅かったら、先に太陽が沈んじゃいますよ。夜になるとサングラスは危ないです」

「そうなの……か？ ……すぐに使うためだけにサングラスを自作したりしないと思うけど……」
「そうなのかな？ だけどやつぱりちゃんとした冒険者だと、そういった事態に備えてサングラス

くらい常備してるんだろうな。

僕が納得していると、ユーラさんが首を傾げた。

「というか、サングラスなんて何に使うんだ？」

「閃光弾を使います」

「閃光弾？」

「光の魔法晶石を爆発させる、瞬間的な目くらましです。僕とユーラさんがサングラスをかけた直後、この閃光弾を弾けさせ、光の爆発で目が眩んだところで、ユーラさんが攻撃を仕掛ければ簡単に敵を倒せます」

「卑怯な気もするし、光の魔法晶石を使い捨てつても勿体ない気がするが……うん、悪くない

戦法だ。過去の大会で光の魔術師が同じような方法を使った記録もあるし、反則にはならぬだろう」

よし、ユーラさんのお墨付きも得られた。

これで、二回戦も勝ち上がったみせる。

ユーラさんに少しでも恩返しできるように、もっといろいろと作戦を考えないと。

僕達は会場に向かっている途中、意外な人を見つけた。

僕、リーゼさんと一緒にこの島に来た冒険者の一人、カカロアさんだ。

さっきまで、同じく一緒にこの島に来た冒険者のユライルさんの試合が行われていたはず。つまりカカロアさんは会場に残って他の試合を見ているか、それとも試合が終わったユライルさんを労ねぎらっているかと思っただけだ。

「クルミ様、第一試合の勝利おめでとうございます。少々時間をよろしいでしょうか？」

僕を見つけたカカロアさんが、そう声をかけてきた。

「熱心な追っかけには見えないけど……クルミ、知り合いかい？」

ユーラさんの質問に僕が答える前に、カカロアさんが答える。

「はい。以前、クルミ様にとでもお世話になりましたカカロアと申します」

カカロアさんがそう言って頭を下げた。

前にリーゼさんと話をした時、カカロアさんも一緒にいたから、彼女はクルミとクルトが同一人物であることを知っている。

「ふうん……悪いが、試合まで時間がないんだ。話なら試合が終わってからしてもらえないかい？」

ユーラさんがそう断りを入れようとしたのだが、カカロアさんは首を横に振る。

「そうお時間は取らせません。クルミ様とユーラ様が出場なさる試合まで、まだ時間があります。

なにせ、一つ前の試合が一時間も長引いたので、今はクルミ様達の一つ前の試合が行われているところです」

「一時間も？ なにがあったんだ？ 試合の制限時間は一時間だから、よほどのことがない限り、

さらに一時間も時間が伸びることはないはずだが」

「ココラ・ユライルのペアに問題が起きて、審議が長引いていたようです」

「ユライルさんになにかあったのですかっ!?」

カカロアさんの言葉に、僕は思わず声を上げた。

もしかして、大きな怪我をしたんじゃないか？ だとしたら、すぐに治療ちりょうにいかないと。

しかしカカロアさんは首を横に振った。

「試合は一時間続き、結果はココラ・ユライルペアの判定勝ちでした。時間が押していたため、すぐに次の試合が始まるはずでしたが、物言いが入りましてココラ様の身体検査を行うことになりました。ココラ様は最初、その身体検査を拒みましたが、最終的には合意。結果、男性として登録し

さんが、僕が回数を数えていたことに驚いていた。

まあ、自分の名前だし、回数は数えられる。

「ああ、クルト様、怪我は、怪我はないのですか？」

「はい。大丈夫です……あの、リーゼさん、少し離れてください。苦しいです。あ、スカートの中に手を入れないでください」

「リーゼ様、落ち着いてください。先ほども申し上げたように、クルト様は威圧に当てられて気絶しただけですから、外傷はありません」

リーゼさんはユライルさんに引きはがされた。

そうか、リーゼさん、僕が気絶したと聞いて心配していたのか。

スカートの中に手を入れていたのは、僕がお尻から倒れて気絶したから、痣あざができていないか触診しんしていたのだろう。

「すみません、心配をおかけしまして。あと、ユライルさん。試合、残念でしたね」

「……はい。抗議はしたのですが、反則負けだと言われました」

「私もなんとか彼女達の参加の継続を望んだのですが、男女ペアでない試合は続けられないと……ユライルさんが男だったら問題なかったのと言われました……非常に残念です」

リーゼさんはそう言って僕の手を取る。

全然残念そうな顔をしていない気がする——というより喜んでるように見える。それに、ユラ

イルさんも、試合が負けになっているのに辛そうには見えない。

きつと、僕の試合に影響が出ないようという配慮だろう。

「それで、リーゼさん。僕はなにをすればいいのですか？ あ、とりあえず紅茶を淹いれましょうか？」

「それはとても魅力的な提案です。泥水にも飽きましたので」

「泥水？」

この町では泥水を飲む習慣でもあるのだろうか？

あんまり体にいいイメージはないけれど。

「いえ、なんでもありません。紅茶を淹いれていただけでも魅力的で、是非お願いしたいのですが、クルト様をお呼びしたのは仕事ではありません。もつと特別な理由です」

リーゼさんは急に真剣な目をして、僕に言った。

「クルト様、次の試合、棄権なさってください」



「クルト様、次の試合、棄権なさってください」

私、リーゼロッテはクルト様を呼び出し、そうお願いをしました。

懇願こんがんといつてもいいお願いです。

私は、クルト様と戦う可能性がある全ての参加者の試合をこの目で見て、その実力を確かめていました。

本当ならばクルト様が運び込まれた医務室に、いの一番に駆けつけたかっただのを堪え、試合の観戦をしていたのもそのためです。

その中でも、次の試合の対戦相手、特にメイド仮面という女は非常に危険です。

試合中の動きには一切の無駄がなく、それでいて気配というものをまるで感じさせない。どれだけ動いても息を乱すどころか、まるで呼吸そのものを必要としないように見えました。

普通の人間とは思えません。

魔族や悪魔が人間に化けていると言われた方がまだ納得できます。

しかも、拳の一撃による破壊力は、おそらくオークロードどころか、クルト様の斧の一撃を凌駕するかもしれません。

前の試合での対戦相手の男性はなんとか一命をとりとめました。今も意識を失っているようです。しばらくの間、まともな食事はできないでしょう。

もしもあの一撃がクルト様に向かっていたらと思うと、私は恐ろしいです。

ですから、クルト様には棄権を促すことにしましたのです。

しかし――

「すみませんが、それはできません」

クルト様から出た言葉は、拒否でした。

それは想定範囲内です。

「一緒に試合に出るユーラさんのことを思っいらっしやるのですね。でも、もし、クルト様が男であるとバレた場合、一番迷惑がかかるのはユーラさんですよ？ 試合のことなら安心してください。特例ですが、ユーラさんのパートナーとして、ユライさんが代理で出場できる許可を取りました。ユライさんはパートナーが性別を偽っていたということで反則負けになりましたが、彼女に落ち度がないことは審判団にも観客にも伝わっています。ユーライさんのことは、ユライさんに探してもらいましょう。名前も似ていますから、いいパートナーになれるわ」

話を聞いたところによると、クルト様が試合に参加している理由は、最初はゴルノヴァに似た男を見つけたから。そして現在は、ユーリシアさんを見つけることと、ユーライさんのパートナーであるという責務だけ。

全てをクリアにした場合、きっとクルト様は大会に出る理由がなくなる。いえ、自分から試合の参加を辞退する。

そう思っていました。

しかし、それは間違いでした。

「リーゼさん、僕はきつと我儘なんです」

「我儘……ですか？」

あまりにもクルト様と縁遠い言葉に、私は思わず鸚鵡返しで尋ねます。

「はい。リーゼさんの話を聞くと、ユラさんのために、僕は出場を辞退した方がいいんだと思います。でも、それはしたくないんです」

クルト様はそう言っ拳を握りしめました。

「僕は戦闘では役に立たない。だから大人しくしていよう。いつもそう思っていました。『炎の竜牙』にいた時も、そして『サクラ』のみんなと一緒に冒険した時も。でも、決勝トーナメントに残って一回戦で戦って、二回戦の作戦を考えて、僕は思ったんです。なんの取り柄もない僕だけど、それでも考えることが僕の力になるんじゃないかって。それで、みんなの戦いの役に立てるんじゃないかって。だから、僕は試合に出たいんです。きっと、ここでユライルさんの方が強いからっていう理由で交代したら、きっと僕はなにもできない人間のままだと思うんです」

そう言うクルト様の目は真剣でした。

なんの取り柄もない云々はこの際聞かなかったことにしますが。

「確かに我儘ですね」

「……やっぱりそうですよね」

「ですが、我儘でいいではありませんか。我儘とは、自分の道を決めて進むことなのです。頑張ってください、クルト様。もしクルト様が男だとバレても、私が全力でフォローします。その代

わり」

私はクルト様の手を掴んで言います。

「絶対に無茶だけはしないでくださいね」

「はい、精いっぱい頑張ります！」

クルト様の二回戦が始まるまであと少し。私は貴賓席で、平静を保つのに必死でした。

あの時のクルト様の目を思い出すだけで、もう顔のニヤケが止まりません。

まだ、貴賓席からその御姿を確認することはできませんが、今頃は入念な準備をなさっていることでしょう。

「よろしかったのですか？ 行かせてしまつて」

ユライルさんが今更のことを仰いました。

「よろしかったかよろしくなかったかで言えば、絶対によろしくありません。しかし、クルト様の男らしいあの目を見れば、私に止めることができるわけがありません」

「外見だけなら姫様以上に女らしかったですけれどね」

「……ユライルさん」

「失礼、言葉が過ぎました。お許しください」
まったく。

立ち読みサンプル
はここまで

ユライルさんとカカロアさんが所属するファントムは、第三席宮廷魔術師であるミニコ様直属の諜報部隊です。そのため王家とは独立した組織という名目ではありますけれど、現在は私の護衛として動いているのですから、言動には気を付けていただきませんと。

もつとも、その程度の些事で動く感情など、クルト様との先ほどのやり取りを思い出せば、強風の前の霧のように散ってしまいます。

「ユライルさん、カカロアさん。申し訳ありませんね。わざわざあなた達を失格にしての説得でしたが、無駄に終わってしまいました」

私が謝罪すると、二人は苦笑して首を横に振りました。

当然、クルト様は気付いていないでしょうけれど、ユライルさんのパートナー、ココラの正体はカカロアさんであり、彼女の男装を指摘して失格させたのは私です。

クルト様に、女装の危険性を教えるつもりだったのですが……その必要はなかったようです。もつとも、彼女は気付いているのでしょうか？

女装ではなく、男装の危険性を。

と、その時、会場の歓声が一際大きくなりました。

舞台の上に、クルト様と、そのパートナーのユーラさんが上がったのです。

私はクルト様ではなく、その横にいるユーラさんを見据え呟きました。

「……クルト様に怪我をさせたらタダではすみませんよ、ユーラさん……いいえ——」

第一試合、クルト様が気を失った後、彼女が抜いた雪華を見てようやく確信が持てました。

まったく、あの程度の変装、すぐに見破れないとは私もまだまだですね。

「タダではすみませんよ、ユーラさん。本当に」

私はそう言って、微笑みました。



舞台上上がった私、ユーリシアの背中を、悪寒が走り抜けた。

なんだ、今のは？

対戦相手の出入口からの敵意ではない。

もつと違う方向から、恐ろしい相手に殺気向けられた気がする。

いや、今考えても仕方ないか。

私は思考を切り替えて、対戦相手であるパープルとメイド仮面が出てくるであろう出入口に目を向ける。

二回戦は定時より一時間遅れで始まるうとしていた。

私とクルミのファンは一回戦より増えているようで、巷でオタ芸と呼ばれるらしい、妙に統一された動きとともに声援を送ってきていた。